

大学生における社会階層の影響

—暮らし向き意識に着目して—

内 田 智 隆

1. 問題の設定と先行研究の検討

本研究の目的は、大学生の学生生活が、出身社会階層から影響を受けているのか否かを、アンケート調査のデータを用いて実証的に明らかにすることである。

子どもの教育達成に出身階層（親の学歴、収入、職業など）が影響を及ぼすことは、これまでの多くの研究で指摘されてきたが、それが大学入学後の大学生活にまで及ぶか否かに関しては十分な研究蓄積がない。既に大学進学率は50%を超えるに至り、学生の大学生活への社会階層の影響を検討することは、日本社会における再生産構造のメカニズムを詳細に明らかにする鍵となるだろう。というのは、高校までと異なり、親の直接的な庇護を離れ一定程度の自律性をもつ大学生活は、親の社会階層の影響をどこまで受けるのか、あるいは、それからある程度自律的になることができるのかの境界域にあるからである。そして大学生間でも社会階層が影響を与えているような場合には、現在の奨学金制度に加え、大学生に対しての更なる支援の拡充が必要となる。まず、これまでの主要な先行研究を整理する。

教育格差の先行研究では、これまで多くの研究の蓄積がある他、階層と学歴、進路選択や学習時間との関係など多岐に渡っており、その対象は就学前から大学進学段階まで幅広く行われている（松岡2019）。大学進学段階の研究に着目すると、社会階層が大学進学率や進路選択にどのような影響を与えているのか、大学進学において格差の拡大の有無を検討するといった研究が行われてきた（矢野・濱中 2006, 近藤・古田 2011）。一方、大多和（2019）も指摘するように、社会階層は、高校生研究においては主要な研究上の視角になっているにも関わらず、大学生を対象とした研究ではほとんど分析の俎上に載せられていないという学問の〈溝〉があるといえる。

そして本研究ではこの社会階層が大学生の学習時間や大学満足度にどのように影響を及ぼしているのかを見る。これらは大学生の学修成果の先行研究として取り上げられている。学修成果の先行研究は認知的能力、情緒的能力、成績や大学満足度などが学修成果として測定され、アスティンの「I-E-Oモデル」を元に、学修成果の規定要因が分析されてきた（小方 2008, 木村他 2009, 山田 2009, 三好 2012, 真鍋 2017）。同様に大学生の学習時間についても注目されており、授業特性や学生の属性による学習時間への影響などの研究が蓄積されている（溝上 2009, 両角 2009）。

先行研究を元に、図1のような分析枠組みを設定する。親の社会階層の学習時間と大学満足度への

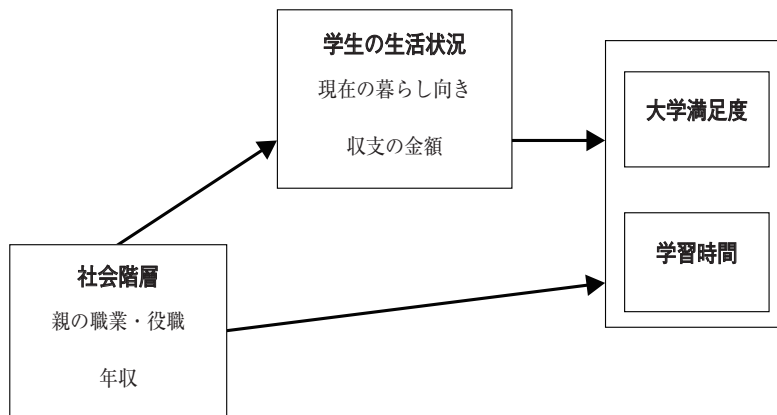


図 1

直接効果に加えて、学生の生活状況を踏まえた間接効果についても検討する。この理由として、大学生は奨学金の受給やアルバイトの存在があり、中学生や高校生ほど親の生活状況が学生の生活状況に直結しない可能性も考えられる。そこで学生本人の生活状況も分析に加えることで社会階層の影響をより詳細に明らかにする。大学生の生活状況を表す変数には、学生生活費の収支の内訳と学生が自分の暮らし向きをどのように感じているかという「暮らし向き意識」を用いる。質問票において、この暮らし向き意識は、現在の暮らし向きをどう感じているかという趣旨の質問で「かなり苦しい」から「かなり楽」までの5件法での回答である。

これらの先行研究を踏まえた上で社会階層と学生の生活状況がそれぞれ大学満足度と学習時間にどのように影響を及ぼしているのかを考察する。

3. 使用するデータ、変数と基礎分析

3.1. 使用するデータ

本研究では第54回（2018年度）学生生活実態調査を中心に分析を行う⁽¹⁾。本調査は毎年学生調査を行っている全国大学生生活協同組合連合会が2018年度に実施した調査である。第54回学生生活実態調査は全部で70の大学生協が参加、全19,593名のアンケート調査である。その中から、学習時間に偏りがあると思われる、医学系と第4学年以上を除いた全13,470名のデータを本研究での分析対象とする。他に本調査の特徴として国立大学の学生が多く回答しているという特徴がある。

3.2. 暮らし向き意識とは何か

分析を行う前に分析で使用する大学生の暮らし向き意識について、なぜ意識を変数として用いるのか、暮らし向き意識とは何を表しているかを見る。

先行研究にもあるように、教育格差の議論は初等中等教育段階を中心に、生まれ育った家庭や地域が教育達成にどのように影響するのかが論じられてきた。一方で大学生ではそれまでの学校段階とは

違い、親の年収や職業など社会階層だけでよいのかは疑問が残る。例えば、親の年収が高くとも、親が学生に多くの金銭的支援をしているとは限らない。同様に親の年収が低くとも、大学に通う子どものために家計を切り詰めて支援をしている場合も考えられる。またアルバイト、奨学金や親からの支援など収入を得る手段も学生によって異なっている。このように考えれば、大学において、社会階層の、学生に対する影響を考える際には、親の年収や職業の直接的な影響を見るだけでは不十分に思われる。また、収入が多い学生が「豊か」であるとも言いきれないように、学生本人の収入金額を見るだけでも学生の経済状況・生活状況を把握するには限界があると思われる。学生の場合、親からの仕送り・小遣いを多くもらっていて収入の合計金額が多い場合もあるが、親からの援助を受けられず、生活費を自分で賄わなければならないため、アルバイトを行い、結果的に収入金額が多くなる場合も考えられる。アルバイトの金額を見ても、その学生は自分が遊ぶために多くの時間アルバイトをしているのか、生活費のためにアルバイトをしなければならないのかは判断がつかない。このように大学生の経済状況・生活状況を把握しようとする場合、親の年収や職業、学生本人の収支だけでは不十分と考えられるため、学生が自身の暮らし向きを評価する暮らし向き意識も用いることでより正確に学生の生活状況を見ることができると思われる。

暮らし向き意識が何を表しているかを明らかにするために暮らし向き意識と学生生活費の内訳で分散分析を行った（表1）。表には収入の結果を記している。暮らし向き意識が苦しい学生、親の年収が低い学生の方が、仕送り・小遣いが少なく、アルバイト時間は多く、収入金額の合計は多くなっている。表は割愛するが、支出の合計額も暮らし向きが苦しいと感じている学生の方が多い。結果をまとめると、暮らし向き意識が苦しい学生ほど収入が多く、その分支出も多いことがわかり、特に暮らし向き意識が楽・普通という学生と苦しいという学生との間に収入源での違いが見られた。支出を見ると暮らし向きが苦しいという学生は教養娯楽費や日常費など遊びや趣味にお金を使っているわ

表1 暮らし向き意識と学生生活費の分散分析

収 入						支 出					
		平均値	標準偏差		F 値			平均値	標準偏差		F 値
収入合計	楽	90201	47809	普*** 苦***	41.303***	教養娯楽費	楽	11053	12096	普*	3.813*
	普通	94822	46904	苦***			普通	10464	11114		
	苦しい	102113	50519				苦しい	10500	12844		
仕送り・小遣い	楽	38564	41741	普*** 苦***	41.001***	日常費	楽	6688	8725		0.914
	普通	34609	37616	苦***			普通	6909	8578		
	苦しい	28768	36328				苦しい	6781	8767		
アルバイト金額	楽	35080	28239	苦***	6.596**	勉学費	楽	1413	3530	普*** 苦***	20.709***
	普通	35201	27402	苦***			普通	1769	4437		
	苦しい	38011	30969				苦しい	2048	4440		
アルバイト時間	楽	12.860	7.010	苦***	22.650***	電話代	楽	2613	4453	普*** 苦***	17.881***
	普通	13.180	7.030	苦***			普通	2983	4833		
	苦しい	14.400	7.831				苦しい	3338	5236		

*p<0.05, **p<0.01, ***p<0.001

表2 暮らし向きと大学に関する学習時間のクロス表

	0-90	91-300	301-	合計	(n)
苦しい	31.8%	36.0%	32.1%	100.0%	1207
普通	28.1%	40.3%	31.7%	100.0%	4209
楽	32.8%	39.2%	28.0%	100.0%	6997
合計	31.1%	39.2%	29.7%	100.0%	12413

p<0.001

けではないことがわかる。つまり、暮らし向きが苦しいと感じている学生は遊びや趣味に使うのではなく、生活費を自分で賄う必要があるため多くのお金を必要としており、一方で仕送り・小遣いは少ないために多くの時間アルバイトをする必要がある学生であることがわかった。また暮らし向き意識と親の年収の相関を見たところ、2つの相関係数は0.228（Spearman）となり、2つに弱い相関があることがわかった。表は割愛するが、暮らし向き意識と親の年収とのクロス表を見ても、親の年収が低い学生ほど暮らし向き意識が苦しいと感じている学生が多いことが伺えた。

3.3. 基礎分析

次にクロス表を用いて分析を行った（表2）。大学に関する学習時間について見ると、暮らし向き意識が楽な学生は学習時間が短く、暮らし向き意識が苦しい学生は学習時間が長い。一方で親の年収と大学に関する学習については有意差が確認できなかった。表は割愛するが、大学生活が充実しているかについては親の年収、暮らし向き意識共に有意差が見られた。いずれも、親の年収が低ければ大学が充実していない学生が多く、暮らし向きが苦しいと感じている学生は大学が充実していないと感じている学生が多い。そこで、暮らし向き意識を統制した上で、親の年収の大学生活の充実に対する影響を見たところ、暮らし向き意識を統制すると特に暮らし向き意識が苦しい層において親の年収による差が有意ではなくなっていることがわかった。この結果から親の年収は学習時間と大学満足度に直接影響しているのではなく、学生の生活状況を介した上で影響していると考えられる。

4. 社会階層の大学生への影響

4.1. 親の社会階層と学生生活による学習時間と大学満足度に対する影響

次に、大学に関する学習時間と大学満足度（大学が充実しているかどうか）を従属変数として回帰分析を行った（表3, 4）。統制変数として性別、学年、学系統、学校所在地、学生の居住形態を用いた（モデル1）。モデル2では、モデル1に親の役職や年収など、社会階層として考えられる親の属性を投入した。モデル3～5にはそれぞれ、学生の生活状況と考えられる変数を用いた。具体的には、学生の暮らし向き意識（モデル3）、学生生活費の収入（モデル4）、学生生活費の支出（モデル5）を用いている。

まず、大学に関する学習時間を見ると（表3）、モデル2から親の年収や職種ではほとんど有意差

が見られず、社会階層が及ぼす影響は小さいと考えられる。モデル3の暮らし向き意識では、暮らし向き意識が楽な学生に比べて苦しいという学生は、そうでない学生よりも学習時間を割いている。モデル4の学生生活費の収入金額では、アルバイトをしていない場合は、アルバイトをしている場合に比べて30分程度学習時間が長くなり、反対にアルバイトを13時間以上していれば学習時間は短くなる結果となった。アルバイト時間が短いほど、大学に関する学習に割く時間も増えると考えられる。支出を見ると（モデル5）、勉強費が多くなるほど学習時間に割く時間も長くなっている。また教養

表3 大学に関する学習時間 重回帰分析

	モデル1 B	モデル2 B	モデル3 B	モデル4 B	モデル5 B
(定数)	5.719***	5.873***	5.875***	5.658***	6.457***
男性ダミー（基準：女性）	0.140	0.201	0.145	0.040	0.024
学年	-0.062	0.015	-0.051	0.015	-0.044
文系ダミー（基準：理系）	-1.683***	-1.704***	-1.674***	-1.631***	-1.560***
サークルダミー	0.033	-0.066	0.041	0.028	-0.011
学校所在地（基準：地方）					
南関東ダミー	0.456***	0.564***	0.473***	0.502***	0.635***
京阪神ダミー	-0.349**	-0.302*	-0.352**	-0.275*	-0.195
自宅ダミー（基準：下宿）	-0.426***	-0.529***	-0.405***	-0.296*	-0.446***
親役職（基準：非管理職）					
管理所ダミー		0.124			
自営業ダミー		-0.457*			
親職（基準：公務員・教員）					
大企業ダミー		-0.044			
中小企業ダミー		-0.207			
自営業、その他ダミー		0.147			
親所得（基準：親低所得）					
親中所得ダミー		-0.089			
親高所得ダミー		-0.087			
暮らし向きダミー（基準：苦しい）					
暮らし向き楽ダミー			-0.369*		
暮らし向き普通ダミー			0.014		
仕送りダミー（基準：7,000円-40,000円）					
仕送り少ないダミー				-0.140	
仕送り多いダミー				0.026	
アルバイトダミー（基準：1-12時間）					
アルバイトなしダミー				0.464***	
アルバイト13時間以上ダミー				-0.570***	
奨学金ダミー				0.076	
食費【1000円】					-0.013*
交通費【1000円】					-0.011
教養費ダミー（基準3000-10000）					0.187
教養費3,000円以下ダミー					-0.465***
教養費10,000円以上ダミー					0.233*
書籍購入ダミー					-0.861***
勉強費なしダミー【基準：中】					0.905***
勉強費多いダミー【基準：中】					-0.039***
日常費【1000円】					0.089
電話代ダミー					-0.109
貯金ダミー【基準1-24,000円】					-0.215
貯金なしダミー					
貯金多いダミー					
N	11737	6928	11737	10452	9578
調整R2	0.041	0.044	0.043	0.049	0.075
F	73.568***	23.659***	53.405***	45.934***	43.983***

*p<0.05, **p<0.01, ***p<0.001

娯楽費を、多く支出していると学習時間が減っていることが確認できる。他に有意差が見られたものには書籍購入費、食費、衣料品や嗜好品への支出である日常費があり、書籍購入費に割いている金額が多い学生は、学習時間が長くなっている。

次に表4の大学生活が充実しているかを見る。モデル2の親の属性では、親が管理職である場合の方が、また高所得者層の方が、学生生活が充実している割合が高い。学習時間によりも、大学満足度の方が社会階層の影響が直接表れている。モデル3から、暮らし向きが楽や普通の学生は、苦しいと

表4 大学生活が充実しているかロジスティック回帰分析

	モデル1 B	モデル2 B	モデル3 B	モデル4 B	モデル5 B
(定数)	1.514***	1.289***	0.720***	1.740***	1.965***
男性ダミー（基準：女性）	-0.506***	-0.519***	-0.499***	-0.484***	-0.515***
学年	-0.012	0.033	-0.023	-0.034	-0.075
文系ダミー（基準：理系）	-0.019	0.038	-0.021	-0.051	-0.075
サークルダミー	1.132***	1.155***	1.130***	1.094***	1.047***
学校所在地（基準：地方）					
南関東ダミー	-0.038	-0.117	-0.037	-0.078	-0.118
京阪神ダミー	0.122	0.130	0.135*	0.124	0.189*
自宅ダミー（基準：下宿）	0.030	0.145	0.002	0.115	0.082
親役職（基準：非管理職）					
管理所ダミー		0.198*			
自営業ダミー		0.061			
親職（基準：公務員・教員）					
大企業ダミー		-0.164			
中小企業ダミー		-0.113			
自営業、その他ダミー		-0.155			
親所得（基準：親低所得）					
親中所得ダミー		0.084			
親高所得ダミー		0.504***			
暮らし向きダミー（基準：苦しい）					
暮らし向き楽ダミー			1.049***		
暮らし向き普通ダミー			0.803***		
仕送りダミー（基準：7,000円-40,000円）					
仕送り少ないダミー				-0.077	
仕送り多いダミー				0.087	
アルバイトダミー（基準：1-12時間）					
アルバイトなしダミー				-0.397***	
アルバイト13時間以上ダミー				-0.060	
奨学金ダミー				-0.093	
食費【1000円】					0.005
交通費【1000円】					-0.001
教養費ダミー（基準3000-10000）					
教養費3,000円以下ダミー					-0.246**
教養費10,000円以上ダミー					0.128
書籍購入ダミー					-0.074
勉学費なしダミー【基準：中】					-0.042
勉学費多いダミー【基準：中】					0.274**
日常費【1000円】					-0.012**
電話代ダミー					-0.167*
貯金ダミー【基準1-24,000円】					
貯金なしダミー					-0.223**
貯金多いダミー					-0.012
N	12863	7431	12863	10881	9936
モデルx2	521.161***	354.003***	689.561***	459.126***	433.369***
Hosmer-Lemeshowの検定	6.602	6.459	9276.483	9.343	6963.807
Nagelkerke R2乗	0.074	0.087	0.097	0.078	0.081

*p<0.05, **p<0.01, ***p<0.001

いう者よりも充実していると答えており、係数を見ても、大学満足度に対する暮らし向き意識の影響が強いことが確認できる。また、アルバイトをしていない学生が、学生生活が充実していないと答える傾向にある。支出では、教養娯楽費への支出が少ない学生は、大学生生活が充実していないと答える傾向にあるが、教養娯楽費が多い学生が、必ずしも学生生活が充実しているとは言えないことが確認できた。勉学費では人より多くの額を支出している学生は充実している。全体として見ると、特に大学が充実しているかにはサークルに入っているかどうかと暮らし向き意識の影響が大きいことが確認できる。

本節の結果をまとめると、親の年収や職業などの社会階層は学習時間にも大学満足度にも直接的には影響していないことがわかった。社会階層は学生がどのような生活をしているか、学生の生活状況を介して学習時間や大学満足度に影響していると考えられる。特に社会階層との関連が強い暮らし向き意識を見ると、暮らし向きが苦しいという意識の学生は、より学習を行っている一方で、大学生生活が充実しているとは思っていない。学生生活費による学生生活が学習時間や大学満足度に与える影響をみると、仕送り・小遣いや奨学金受給の有無は直接影響していなかったが、アルバイト時間は大きく影響していた。アルバイト時間が短いほど学習時間が長くなることにつながるが、大学満足度を見ても、ほどほどにある程度アルバイトをしている学生で大学満足度が高いということが確認できた。また、学生がどこに支出を行いどのように過ごしているかが学習時間や大学満足度に影響していることも確認できた。

4.2. 暮らし向き意識ごとに見た学生生活が及ぼす影響

前節では社会階層、学生生活（生活状況）が学習時間と大学満足度にどのように影響しているのか分析を行い、社会階層以上に学生の生活状況が学習時間と大学満足度に影響していることが明らかになった。そこで本節では暮らし向き意識ごとに層分けを行い、学生生活費の収支の内訳、その金額が学習時間、大学満足度にどのように影響しているのかを見る（表5, 6）。前節と同様に学習時間と大学満足度に分けて分析を行う。分析では統制変数を入れたモデル1、学生生活費の収入を入れたモデル2、支出を入れたモデル3の3つのモデルを使用した。本節で使用する表は紙幅の都合上モデル1を除いたモデル2と3の係数と有意確率のみを載せている。

最初に大学に関する学習時間を見る（表5）。暮らし向き意識が楽・普通の学生はアルバイト時間が少なく、その分学習時間が長く、これは前節の結果と同じである。一方で暮らし向き意識が苦しいという学生は前節の結果とは少し異なっている。アルバイト時間での有意差が見られず、暮らし向きが苦しいと感じている学生においてはアルバイト時間の長さが及ぼす学習時間への影響は小さいと言える。支出では、暮らし向き意識が楽や普通という学生は教養娯楽費や日常費の支出が多い場合に学習時間が短くなる傾向にある一方、苦しいという学生はそれらの支出による有意差は見られないことが確認された。どの暮らし向き意識でも、勉学費が多くなるほど学習時間が増えるのを確認できるが、特に暮らし向き意識が苦しい層で勉学費が学習時間に及ぼす影響が大きいことがわかる。学生生活費

表5 大学に関する学習 重回帰分析

	暮らし向き 楽		暮らし向き 普通		暮らし向き 苦しい	
	モデル 2 B	モデル 3 B	モデル 2 B	モデル 3 B	モデル 2 B	モデル 3 B
(定数)	5.652***	6.447***	5.397***	6.321***	6.145***	6.786***
男性ダミー（基準：女性）	0.034	-0.023	0.212	0.293	-0.436	-0.491
学年	-0.063	-0.126	0.105	0.018	0.328	0.354
文系ダミー（基準：理系）	-1.496***	-1.358***	-1.760***	-1.803***	-1.779***	-1.755***
サークルダミー	-0.049	-0.071	0.301	0.214	-0.386	-0.282
学校所在地（基準：地方）						
南関東ダミー	0.462**	0.654***	0.629**	0.643**	0.491	0.846
京阪神ダミー	-0.217	-0.164	-0.324	-0.223	-0.456	-0.105
自宅ダミー（基準：下宿）	-0.330	-0.568**	-0.141	-0.227	-0.178	-0.290
仕送りダミー（基準：7,000円-40,000円）						
仕送り少ないダミー	-0.282		0.088		-0.342	
仕送り多いダミー	-0.026		0.189		0.113	
アルバイトダミー（基準：1-12時間）						
アルバイトなしダミー	0.506**		0.457*		0.286	
アルバイト13時間以上ダミー	-0.509***		-0.638***		-0.714	
奨学金ダミー	-0.010		-0.034		0.057	
食費【1000円】		-0.014*		-0.013		-0.012
交通費【1000円】		-0.013		-0.010		-0.033
教養費ダミー（基準3000-10000）						
教養費3,000円以下ダミー		0.163		0.091		0.580
教養費10,000円以上ダミー		-0.378*		-0.565**		-0.563
書籍購入ダミー		0.242		0.122		0.584
勉強費なしダミー【基準：中】		-0.902***		-0.668**		-1.177**
勉強費多いダミー【基準：中】		0.781***		0.988***		1.101*
日常費【1000円】		-0.042***		-0.034**		-0.050
電話代ダミー		0.088		0.070		0.169
貯金ダミー【基準1-24,000円】						
貯金なしダミー		0.036		-0.189		-0.764
貯金多いダミー		-0.204		-0.197		-0.702
N	5646	5426	3485	3227	1021	925
F	25.032***	23.322***	18.534***	16.377***	4.324***	5.597***
調整 R2	0.046	0.069	0.057	0.079	0.038	0.082

* p<0.05, ** p<0.01, *** p<0.001

の影響があるのは、とりわけ暮らし向き意識が楽や普通という学生間においてであると言える。

次に大学生生活の充実の有無に対する学生生活費の影響を見る（表6）。暮らし向き意識が楽、普通と感じている学生はアルバイトをしていない場合に、学生生活が充実していないと答える傾向にある。また暮らし向きが苦しいと感じている学生においては、アルバイト時間の大学生生活の充実へ与える影響は小さい。また暮らし向き意識が楽な学生では、教養娯楽費の支出が少ない学生が、学生生活が充実していないと答える場合が多く、楽と普通の学生において、日常費が少ない学生の方が学生生活が充実していることがわかる。暮らし向き意識が苦しいという学生においては支出額の大学生生活の充実への影響は小さいことがわかる。

本節では、暮らし向き意識ごとに学生生活費を使った分析を行ったことで、暮らし向き意識によって学生生活の学習時間や大学満足度に対する影響が違うことが確認できた。暮らし向きが楽や普通という意識の学生ではアルバイト時間や教養娯楽費の支出の多寡が学習時間や大学生生活の満足度に影響していたり食費や勉強費をどの程度使っているかによって学習時間や大学満足度が違ったりすること

表6 大学生生活が充実しているか ロジスティック回帰分析

	暮らし向き 楽		暮らし向き 普通		暮らし向き 苦しい	
	モデル 2 B	モデル 3 B	モデル 2 B	モデル 3 B	モデル 2 B	モデル 3 B
(定数)	2.090***	2.238***	1.703***	2.030***	0.569	0.890*
男性ダミー（基準：女性）	-0.520***	-0.488***	-0.529***	-0.597***	-0.297	-0.428*
学年	-0.051	-0.048	-0.087	-0.215**	0.064	0.063
文系ダミー（基準：理系）	-0.120	-0.106	0.019	-0.012	-0.030	-0.111
サークルダミー	1.061***	1.018***	1.229***	1.200***	0.996***	0.900***
学校所在地（基準：地方）						
南関東ダミー	0.110	0.069	-0.249	-0.317*	-0.089	-0.214
京阪神ダミー	0.182	0.214	0.035	0.201	0.216	0.159
自宅ダミー（基準：下宿）	-0.023	-0.050	0.115	0.095	0.102	0.155
仕送りダミー（基準：7,000 円-40,000 円）						
仕送り少ないダミー	-0.058		-0.019		0.015	
仕送り多いダミー	-0.002		0.153		-0.059	
アルバイトダミー（基準：1-12 時間）						
アルバイトなしダミー	-0.465***		-0.315*		-0.312	
アルバイト 13 時間以上ダミー	-0.046		-0.001		-0.074	
奨学金ダミー	0.039		0.014		0.007	
食費【1000 円】		0.002		0.010		0.005
交通費【1000 円】		0.003		0.006		0.005
教養費ダミー（基準 3000-10000）						
教養費 3,000 円以下ダミー		-0.272*		-0.218		-0.174
教養費 10,000 円以上ダミー		0.100		0.178		0.027
書籍購入ダミー		-0.130		-0.057		-0.129
勉強費なしダミー【基準：中】		-0.077		0.027		-0.282
勉強費多いダミー【基準：中】		0.254		0.414*		0.100
日常費【1000 円】		-0.015*		-0.016*		0.001
電話代ダミー		-0.242*		-0.061		-0.126
貯金ダミー【基準 1-24,000 円】						
貯金なしダミー		-0.173		-0.264		-0.110
貯金多いダミー		0.174		-0.110		-0.044
N	6178	5615	3618	3343	55,868	978
モデル x2	224.752***	205.547***	188.449***	205.444***	40.651***	50.167***
Hosmer-Lemeshow の検定	6.703	4.862	4.813	4.69	6.321	4.758
Nagelkerke R2乗	0.073	0.074	0.093	0.115	0.108	0.075

*p<0.05, **p<0.01, ***p<0.001

が確認できた。暮らし向きが苦しいという意識の学生ではそのような収支による影響が小さく、そうした学生に対する、学生生活の差異が及ぼす、学習時間と大学満足度への影響は小さいことがわかった。前節の知見を踏まえれば、暮らし向き意識が苦しいという学生は、他の暮らし向き意識の学生とは違い、どのような生活を送っていても、大学での学習や大学以外の学習に時間を割いているが、大学生生活に対する満足度は低くなっている。

5. 結論と今後の課題

ここまでの結論と今後の課題を述べる。冒頭に上げた分析枠組みによる分析では、社会階層は直接大学生生活の満足度や学習時間には影響しておらず、学生の生活状況に影響を与える形で間接的に影響していることが明らかになった。社会階層は大学進学段階まで、直接、教育達成に影響していることを明らかにしてきた先行研究と、やや異なる結果である。学生生活費の内訳と暮らし向き意識から見える学生の生活状況が大学満足度と学習時間に影響していることが、4章2節で確認できた。また4

章3節では学生生活費が影響を及ぼしているのは暮らし向き意識が楽や普通と感じている学生間であり、暮らし向きが苦しいという学生に対する学生生活費の影響は小さいことがわかった。

学生の生活状況を示す、暮らし向き意識は社会階層と関連が確認されたことに加えて、暮らし向きが苦しいと意識している学生は、多くの生活費を自分で賄う必要がある一方で、仕送りが少ないためアルバイトを長い時間しなければならない学生であることが確認できた。暮らし向き意識の苦しさが生じるのは、このような学生生活の経済的な苦しさに加えて、自分の出身社会階層が周りより低いことから、現在の自分の暮らし向きがより苦しいと認識する可能性が考えられる。実際の生活の苦しさ、経済的な苦しさに加えて、自分の出身社会階層が影響して暮らし向き意識が形成されている場合も考えられる。そして学生の暮らし向きの意識も踏まえた生活状況が学習時間と大学満足度に影響していると言える。

現在の大学生の特徴として、授業には真面目に出席し、いい成績を取ろうとしており、そこには就職活動、また就職後のキャリアを有利に進めることが目的の一つにあることが先行研究で指摘されている（山田，2007）。そのキャリアを有利に進めるという目的は大学の学習だけでなく、就職のための資格を取る資格志向も促進している。これを踏まえれば、生活が苦しいと感じている学生は「よい」キャリアを積んでその苦しさを抜け出そうとする気持ちが強いために、暮らし向きが楽な学生よりも熱心に学習に取り組んでいると考えられる。また暮らし向き意識が苦しい学生は「良い」就職先に行こうとするために大学に関する学習にも、他の学生より時間を割いていると思われる。しかし暮らし向き意識が苦しい学生は多くの時間アルバイトをしなければならず、時間的にも金銭的にも余裕がなく、友人や他学生との交流ができない等の要因によって、大学満足度が低くなるのだろう。暮らし向き意識の苦しさには、出身社会階層が関連しており、それを考えれば、奨学金もあり、中学や高校に比べ親の所得の影響を受けにくいと考えられる大学においても親の社会階層の影響が存在していることがわかる。これまであまり触れられてこなかった大学における社会階層の影響を学生の生活状況を踏まえたことで明らかにできたことが本研究における成果の一つである。

今回の分析では暮らし向き意識やアルバイト時間が学習時間や大学満足度に影響している一方で、親からの仕送り・小遣いの影響は小さいという結果が出た。つまり、自分の暮らし向きの認知のような、親からの直接的な金銭的支援だけではとどまらない、社会階層の影響が学生生活、学生の生活状況に対して生じているのである。

今後の課題として、時間だけでなく、学修成果に対しても社会階層の影響を見ることが必要であること、親の属性以外の観点からも社会階層を考えることや大学生の暮らし向き意識についてもより詳細な分析が必要である。また、本稿では学習時間と大学満足度それぞれに対する社会階層の影響を分析したが、今後は学習時間の大学満足度に対する影響の検討も必要である。というのは、本稿の直接の目的ではないものの、大学満足度を高める要因として、学習時間がどのような影響力をもつかを検討することは、日本の大学教育をどのように編成していくかという大学にとっての課題に対しての示唆を導くことになるからである。

注(1)〔二次分析〕に当たり、東京大学社会科学研究所附属社会調査・データアーカイブ研究センター SSJ データアーカイブから〔「第 54 回学生生活実態調査, 2018」(全国大学生生活協同組合連合会)〕の個票データの提供を受けました。

文献一覧

- 藤森宏明, 2018, 「学生生活費に及ぼす奨学金の効果についての再分析」東京大学大学総合教育研究センター『大総センターものぐらふ 13 教育費負担と学生に対する経済的支援のあり方に関する実証研究』: 87-127.
- 伊藤由樹子・鈴木亘, 2003, 「奨学金は有効に使われているか」『季刊家計経済研究』58: 86-96.
- 小林雅之, 2009, 『大学進学への機会 均等化政策の検証』東京大学出版会.
- 近藤博之・古田和久, 2011, 「教育達成における階層差の趨勢」石田浩・近藤博之・中尾啓子編『現代の階層社会 2 階層と移動の構造』東京大学出版会: 89-106.
- 真鍋亮, 2017, 「大学生の学修成果に関する研究の展開―入試形態および入学時の能力との関係に着目して―」『大学論集』50: 273-286.
- 松岡亮二, 2019, 『教育格差―階層・地域・学歴』筑摩書房.
- 岑研究会, 2015, 「日本の教育投資促進に向けて」ISFJ 日本学生政策会議.
- 三重野卓, 2012, 「人びとの暮らしとその将来見通し―生活意識の視点から」武川正吾・白波瀬佐和子編『格差社会の福祉と意識』東京大学出版会: 33-56.
- 溝上慎一, 2009, 「『大学生の過ごし方』から見た学生の学びと成長の検討」『京都大学高等教育研究』15: 107-118.
- 両角亜希子, 2009, 「大学生の学習行動の大学間比較―授業の効果に着目して―」『東京大学大学院教育学研究科紀要』49: 191-206.
- 小方直幸, 2008, 「学生のエンゲージメントと大学教育のアウトカム」『高等教育研究』11: 45-64.
- 小黒一正・渡辺大, 2008, 「1999 年奨学金制度改革とそれ以後の効果分析」財務省総合政策研究所.
- 大多和直樹, 2019, 「大学生（学生）研究と高校生（生徒）研究の〈溝〉: 〈溝〉を超える新しい大学生研究に向けて」『教育社会学研究』104:105-124.
- 佐野美智子, 2008, 「経済的豊かさと暮らし向き満足度との関連―所得格差は幸福格差につながるのか」『季刊家計経済研究』80: 55-63.
- 下山朗・村田治, 2011, 「奨学金給付と学生の消費行動―学生生活実態調査の個票データを用いて―」『生活経済学研究』33: 19-32.
- 浦田広朗, 2010, 「大学生の学習時間に及ぼす奨学金の効果」『平成 21 年度先導的大学改革推進委託事業 高等教育段階における学生への経済的支援の在り方に関する調査研究報告書』
- 矢野真和・濱中淳子, 2006, 「なぜ、大学に進学しないのか―顕在的需要と潜在的需要的決定的要因―」『教育社会学研究』79: 85-104.
- 山田浩之, 2007, 「大学生の学習行動」山田浩之・葛城浩一編『現代大学生の学習行動 高等教育研究叢書 90』: 11-22.